

○山口千津子

ワークショップⅣは開始9時でございますけど、少し御案内をさせていただきたいと思います。きょうは英国及びアメリカからのスピーカーの方をお招きいたしておりますので、同時通訳が入ります。皆様お持ちでなければ、入り口のところで同時通訳の器械をいただけますので、ぜひ、私は要らないわとおっしゃる方以外は、同時通訳の器械をお持ちになった方が、よく御理解できるのではないかなというふうに思います。同時通訳のスイッチが、ここにございますように、1が日本語、2が英語というふうになっておりますので、ぜひ御活用いただけたらと思います。

それからワークショップが始まりましたら、申しわけございませんけれども、携帯電話をマナーモードにいただけますか、スイッチを切っていただけましたらと思います。よろしく願いいたします。



皆様、おはようございます。9時になりましたのでワークショップⅣ、シェルター動物のケア・より良い譲渡に向けてを始めさせていただきます。朝早くから御参加いただきましてありがとうございます。

私たちがこのワークショップを企画いたしましたのは、最近、確かにいろんなテレビでも日本の、これだけペットブームが続いているにもかかわらず、ブームというのは使いたくない言葉ですけども、一応マスコミではそのように呼んでおりますので、続いていても、その裏側ではまだまだたくさんの動物たちが、飼い主から手放され、新しい飼い主を待っている状態ということはあちらこちらのテレビ、新聞でも報道されております。そして、最近では国も、今まででは狂犬病予防法のもとにおいて、新しい飼い主への譲渡というのはほとんどされなくて、ごめんなさいと眠らされていた状況を少しでもよくしようと、もう大分前から少しずつ各自治体、頑張っ

てこられているんですけども、最近では国の方がその方針を全面に打ち出してこられました。

ところが1頭でも本当にだれも安楽死はしたくない。

けれども、だからといって、今度はたくさんの動物を全然、病気も性格もチェックしないで、また、相手がその後どういふふうな飼育管理なさるか、どんなおうちか、どんな家族か、チェックすることなく、とにかくもらってくださいという形でお渡しになって、その後、交渉事故が起こったりと、いろんな問題が出てきているということが、私たちの耳にもよく届くようになりました。

そこで皆さん気持ちは一緒。でも、そのやり方がよくわかっていないというところがあったことがありますので、その先進国であります欧米からスピーカーの方をお招きして、それぞれのお国での譲渡についてお話をいただき、そして日本でも官民協働ということで、新しい施設ではなくても動物管理センター、あるいは動物愛護相談センターというふうなところに収容された動物たちが1頭でも多く、よい方のところへ行って、お互い人と動物がともに幸せに暮らせるようにと、官民協働の作業をされておられます神戸市、それから兵庫県、そして神戸市と一緒に民間として譲渡の部門のお手伝いをさせていただいております、私ども日本動物福祉協会のCCクロ、それぞれの方々から毎日の譲渡の規則、あるいはその作業ぶりをお話ししていただきたいというふうに思って、このワークショップを企画させていただきました。

それではこのワークショップを開催するに当たりまして、多大なサポートをいただきましたマースジャパンリミテッドの佐野泰介様より少しごあいさつをいただきたいと思います。よろしく願いします。

○佐野泰介

おはようございます。ただいま御紹介にあずかりましたマースジャパンリミテッドのマーケティング、佐野と申します。弊社はアメリカに本社を置きまして、ペディグリーブランド、カルカン、シーザーなどペットフードを製造、販売しているメーカーになります。弊社は当然ペットフードを売っている会社ですので、犬、猫によってビジネスは成り立っているんですが、ここ最近、世界じゅうで保護犬の問題について取り組もうという機運が



高まっております、実際に米国では2004年から保護犬の保護という活動を開始しております。

日本でもペディグリーブランドは今後、すべての犬に温かいおうちをというスローガンのもとに保護犬の問題、そして当然、これからお話しされるシェルターの問題等々にペットフードを越えて啓蒙活動、また、消費者に啓蒙活動や寄附、支援などをしていこうというふうに考え、今回のスポンサーに当たらせていただいております。

弊社は常に仕事する上で考えているのが、メイク・ザ・ディファレンスというキーワードが一つありまして、私はこういうふうに考えているんですが、意味のある変化、また、意味のある違いをもたらすために自分たちは何ができるか。今回は、私はこのペディグリードッグアダプションというプログラムのプロジェクトリーダーをしておりますので、単純にペットフードを売るだけではなく、売った利益をどのように社会に還元できればメイク・ザ・ディファレンスが起こせるかという観点でメーカーの一責任者としても今回のワークショップからいろいろ学ばせていただければと思います、スポンサーをさせていただいている次第です。

本日のセッションが私だけではなく、皆様がメイク・ザ・ディファレンスを起こすきっかけに何かなればいいと思います、本日のパネラーの皆様、御協力よろしくお願いたします。ありがとうございました。

○山口千津子

ありがとうございました。それではこれからワークショップIVを始めさせていただきます。まず、きょうの流れをお話しさせていただきますと、最初に英国からお越しいただきましたミランダ・ラック氏により、英国におけるシェルターワークについてお話をいただきます。そして、ハワイアンヒューメインソサイエティのパメラ・バーンズ氏によって、よりよい譲渡のためのシェルター動物のケアについてお話いただきます。その後、兵庫県で譲渡事業をされておられます三谷先生から、兵庫県の譲渡事情と飼い主と会の活動をお話いただき、最後に神戸市と社団法人日本動物福祉協会CCクロの官民協働ということで、神戸市の方からは湯木先生、そして日本動物福祉協会からはCCクロ現地の代表をしております北村美代子さんからお話をいただきまして、その後、5分ほど休憩をいただきまして、パネルディスカッションに移らせていただきます。5分ほどの休憩の間に、舞台セッティングを少し変えさせていただきたいと思います。

それでは、きょうのワークショップ全体をリードさせていただきます座長の山崎恵子先生を御紹介させていただ

きます。山崎恵子先生は今回の国際会議の、私と同じようにアドバイザーでもございます。昨日ごあいさつはお聞きになられたと思いますし、先生のバックグラウンドにつきましては、皆さんがお持ちのプログラムの中にしっかり書いてございますので、それぞれのきょう御発表いただける先生方のプロフィールもすべてそこに書かれておりますので、それにつきましては皆様お読みいただけた、あるいはお読みいただけるということでここでは省かせていただきたいと思います。それでは、山崎恵子先生、よろしくお願いたします。

○山崎恵子

山口先生、ありがとうございました。

それではきょう午前中、ここで座長を務めさせていただきます私の方で、スピーカーの方々を随時呼び上げたいと思います。座長からのあいさつとしては、きのういろいろとお話をさせていただきましたので、余り長々とお話をするつもりはございませんが、シェルターワークに関しまして一言、昨今の事情に関して皆様方にも最初を知っていただきたいことが二つほどありますので、それだけちょっと簡単にお話させていただきます。



一つは、アメリカも日本もノーキルという言葉、あるいはゼロキルという言葉が最近、標語のように世間に広まっておりますが、全く殺処分がないという、あるいは全く安楽死がないという状況というのは、実は極めて困難です。そして場合によっては動物のために安楽死を選ばなければいけない状況もあるということを、ぜひ御理解いただきたいと思います。とある行政のゼロキルが最近メディアでは、非常に高々と取り上げられておりますが、あちらの行政がお断りになった犬が市を離れて県に行く、あるいは他府県に連れ込まれるという事件なども起こっております。皆さん御存じだと思いますが、メディアはいいことしか取り上げません。もっと周辺視野を広く持って、一体何が起こっているのかということは、ぜひ、御自身でお勉強していただきたいと思います。

それからもう一つは、シェルターという皆さん、か

わいそうなわんちゃん、猫ちゃんという形容詞をお使いになりがちだと思いますが、かわいそうな子を救ってあげたいという気持ちがある限りはシェルターワークは成功しません。最高の伴侶を見つけたいからシェルターに行くんだという人がふえない限りは、シェルターワークというのは成功しないのです。ちょっと怪しい話かもしれませんが、私のもう10年来の友人にアメリカで結構名の売れておりますアニマルコミュニケーターがおりまして、彼女がよく言うのは、動物たちはせつな的で今を生きるものである。今は中間地点にいて、次のうちを僕は探してるんだという気持ちでみんなシェルターにいるのだ、と彼女は言っています。

そこでこの子って虐待されてたのよねという声をだれかがかけた途端に、犬や猫の目が暗くなるそうです。ああ、そういえばそんなこともあって思い出しちゃったという訳です。だから虐待されたかわいそうな子という声はかけないでください。今、ここにいられてよかったね、じゃあ、次はもっといいところに行かれるといいね。そして私は最高の伴侶を求めているからここに来てるのだよといエブリシング・ポジティブな形でシェルターというものに足を踏み入れるという準備が人間側にできない限りは、本当の意味でのシェルター事業は成功しないと思います。これから英国とアメリカの事例をぜひ、私も楽しみにいたしております。いろいろなことを学べると思います。

それではまず、一番最初のスピーカー、トップバッターとして英国のシェルターワークに関して、ミランダ・ラック先生に御登壇いただきたいと思っております。

先生の御紹介は山口先生もおっしゃっていたとおり、こちらに書いてありますので御紹介は省かせていただきます。